様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２３ 日現在

機関番号：３２６２７
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５２８４０５７

研究課題名（和文）感受性の〈不〉道徳性と教育―イギリス近代文学におけるジェンダー編成の諸相

研究課題名（英文）(Im)Moral Sensibility and Education: Aspects of Gender Identity Formation in Modern British Literature

研究代表者
土井　良子（DOI, Ryoko）

白百合女子大学・文学部・准教授

研究者番号：８０３３８５６６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　12,600,000円

研究成果の概要（和文）：18 世紀後期から19世紀前半のイギリスにおいて、感受性に内包された道徳と不道徳の二律背反性を、女性作家たちがどう意識し、社会的正当化を試みたかを、ジェンダー、社会史、医学史、新歴史主義、ポスト・コロニアリズムという多面的な視座から考察した。その結果、共感的感受性が母性、慈善、教育、風俗、植民地支配のなかでイデオロギーとして機能している位相がこの時代の文学から看取できることが明らかになった。また、菜食主義との関連や医学的・宗教的意義からは、感受性が同時代に持ちえる多層的かつダイナミックな浸透が浮かびあがってきた。

研究成果の概要（英文）："Literature of sensibility" in late 18th-century Britain endorsed moral sentiments, such as sympathy and benevolence, and yet writers, in particular women, also feared that sensibility could at the same time lead to cruelty, profligacy and self-interested indulgence at the height of pleasure-seeking consumer culture.
This project focused on the moral ambivalence of eighteenth-century sensibility and aimed to examine how women writers tried to regulate and control its public reception through literary representations. By adopting various approaches, such as gender studies, medical history, social history, and post-colonialism, we successfully showed how this two-sided sensibility served as gender ideology in constructing discourses on charity, education, maternity, consumer culture and colonialism. The complexity of the culture of sensibility was explored especially in terms of its relationship with medical and religious discourses as well as with vegetarianism.

研究分野：イギリス文学

キーワード：感受性　女性　教育　慈善　消費　医学　植民地　動物愛護

１．研究開始当初の背景

本研究は、土井良子（研究代表者）がここ5年ほど関心を持って進めてきた18世紀末における女性による「感受性文学」(Literature of Sensibility）と教育書との関係についての研究を、ありきたりのジェンダー論に収めるのではなく、より大きな社会的文脈の中で位置づけるべきであるという確信に基づいている。

ゴシック小説を同時代の母性論や女子教育論とつなげられないか研究していく過程で、小説中に使われる女性の抑圧や監禁、性的表象やレイプ、饗宴、旅行といった文学的モチーフは、たしかにジェイムズ・ウェストが *Contesting the Gothic* (1999年)において示したようにフランス革命に揺れた同時代の政治的な文脈内にあるが、より正確には感受性文化の一形態として消費文化とつながっており、その文脈で読解すべきであると考えるにいたった。ゴシック小説のヒロインの過ちや悲劇が示す道徳的訓戒は、表面的には同時代の女子教育論と呼応しているが、悪漢、暴力、淫行といった道具立てはこの時代の消費社会において跋扈する遊興、酩酊、暴動、窃盗、その結果としての女性の抑圧と背後でつながっている。とすれば、女性の教育的言説における感受性の道徳性、教育的価値の強調は、そうした感受性文化の不道徳で反教育的な側面に対する不安や抵抗として読むべきであり、ジェンダーの問題もその文脈の中で考えるべきであると考えた。

また、こうした感受性の内包する二律背反性と消費文化との（不）道徳的な関連性は、他者への共感や思いやりの心の涵養の必要性が長らく指摘されている現代の教育の諸問題に対する歴史的考察に基づいた文学批評側からのアプローチを提示することができるのではないかと考えた。引きこもりや非行の原因の一つに強い感受性があげられ、いじめの問題に対しても被害者・加害者の人間関係に対する感受性の差異が指摘されている現在、18世紀感受性文学の研究はそうした現代的問題に対しても意義ある考察と提言を提供できると考えたのが、研究開始の際の背景である。

２．研究の目的

イギリス18世紀後半の「感受性文学」は、感覚や内省を道徳的美徳としてとらえることで、感受性豊かな女性作家の登場を促し、新しい幼児・女子教育論をも生み出した。しかし、感受性は奢侈や放蕩という同時代の消費文化の枠組みの中で快楽（pleasure）と結びつき、放蕩や淫蕩、風紀紊乱ともつながっている。本研究は、感受性に内包された道徳と不道徳の二律背反性を、女性たちがどう意識し、彼女たちの教育的言説の中でどう制御し、表象していたかを考察することを目的とした。

18世紀末、女性たちが風紀改善運動に乗り出したとき、不道徳で猥らな感受性への不安や抵抗が共有されていた。それを言説の上から明瞭にすることで、幼児・女子教育論が飛躍的に前進したこの時代の文学の意義を社会文化史および教育史的観点から検証する。最終的には、感受性が内包する道徳的二律背反性と消費文化とのつながりをジェンダーの観点から解きほぐすことで、他者への共感や思いやりの心の涵養が求められている現代の諸問題へのアプローチを、歴史的考察に基づいた文学批評から試みた。

３．研究の方法

①　資料調査については、学期中は主に国内図書館での調査または二次資料を中心とした必要な書籍の購入により行った。歴史的な資料については利用可能な場合はEighteenth-Century Collection on Line（ECCO）などのデータベースを活用したが、そこでは収集できない場合あるいは所属機関では利用できない場合は夏期・春期休暇を利用してイギリス、あるいはヨーロッパの図書館での資料収集につとめた。

②　調査の主な対象は18世紀後半から19世紀前半の文学作品になるが、主に女性作家の感受性に焦点を絞って行われた。一方で、家父長制度や暴力、犯罪、酩酊などと結びつきやすい男性、および同時代の男性作家の感受性言説に対しても目配りをした。

③　批評的立場としては、ジェンダー論やフェミニズム論などの理論について念頭におきながらも、全体としてはそうした理論的な解釈ではなく、社会的・歴史的状況を精査したうえでのテクスト読解に基づく考証的アプローチを重視した。

吉田は新歴史主義的なアプローチを取り、吉野および川津はポスト・コロニアリズムの視点を取り入れることで新たな感受性研究の地平を切り開くことになった。

④　研究の進め方は、基本的に研究開始時に割り振られた研究対象、テーマ、分担にしたがってそれぞれ遂行した。年に２～3 回開催した研究会において、研究の進捗状況の報告と意見交換を行うと同時に、関連する研究者を国内外から招聘して講演を依頼し、意見交換をすることで、本研究の成果を外部の目から批判・検討することを行った。

⑤　最終年度は本研究の成果として自発的に論文集を作成することを行い、各自論文を執筆し、研究会で成果について全員で質疑応答を行った後、加筆修正を行い、取りまとめることにした。

各メンバーの方法は以下の通りである。

土井良子

18 世紀末～19 世紀初頭のハナ・モア、マライア・エッジワース、プリシラ・ウェイクフィールド、メアリ・ウルストンクラフトなどの女子教育論や教育的著作における感受性論を女性の家庭内役割との関係に注目して考察し、それと比較してアン・ラドクリフ、

ジェイン・オースティンら女性作家の同時代の作品における感受性表象・女性表象についてジェンダー的観点から国内での資料収集・調査分析を主体として作業を行った。

吉野由利

感受性と「ファッション」(fashion)、「奢侈」(luxury)の関係をグレイト・ブリテンとアイルランドの合同およびイギリス帝国の拡張のコンテクストで主に考察した。主な研究対象は、小説、児童文学、各種教育論（児童・青少年・女性・専門職を対象）を横断して執筆活動を展開し、最も社会的影響力を与えた作家の一人であるマライア・エッジワースの作品である。批評的なアプローチは、歴史研究の動向を踏まえながら、ジェンダー批評、ポストコロニアル批評、物語論の理論を組み合わせて応用した。同時代の視覚表象も参考にした。調査・研究は主に所属先大学で行い、大英図書館やリュクサンブール美術館など英仏の図書館・美術館での海外資料調査を１回行った。

川津雅江

イギリス・ロマン主義時代の女性作家のうちメアリ・ウルストンクラフト、サラ・トリマー、キャサリン・マコーリー、エリザベス・ハミルトンを中心に、児童書、教育書、東洋学書における動物愛護の言説を特に教育と食の倫理の観点から調査・研究した。批評的アプローチは、ジェンダー、歴史、文化史で、主としてECCOで収集した文献分析を行った。国内で収集不可な資料は大英図書館やケンブリッジ大学図書館で収集した。

大石和欣

18 世紀イギリスにおけるスキャンダルと感受性の問題について社会史関係の二次資料から調査をはじめ、その後消費文化についての歴史的状況を確認し、その後は慈善との言説上の類似点・相違点に留意しながら、一次資料の調査を始めた。国内では ECCO などのデータベースで参照可能なものを調査し、調べきれないものについてはイギリスにて資料調査を行うことでおぎなった。

調査対象としては、主に女性作家に焦点をしぼってはじめたが、結果論としては男性作家との比較が不可欠となった。

本科研の研究打ち合わせ、あるいは関連学会や研究会への出席、口頭発表などを通して、成果について検討する機会を持ち、論を補足・修正することで、論の質を確保するように努めた。

吉田直希

18 世紀中葉に書かれた女子教育論を出発点とし、そこで批判されている「感受性に潜む不道徳性」に焦点を当て、文化の商品化が女性消費者に与えた影響を考察した。コーヒーハウスと定期刊行物、ヘイマーケット、ラニラでの仮面舞踏会、ヴォクソール歓楽園とヘンデル、トマス・アーンの演目、ホガースによる諷刺版画、そしてジェイムズ・ラッキントンによる量販古本業が、それぞれ独自の方法で、新しい女性消費者（読者）の感受性を創造してきたことを解明した。新歴史主義の成果を批判的に取り入れることを念頭におき、調査・研究は主に ECCO を利用して行った。また、ホガースやメソディズム運動に関する資料については海外での調査を 2 回行った。

小川公代

感受性言説と有機論に関するロマン派研究（Alan Richardson、Paul Goring、L.S. Jacyna など）において、感受性と想像力がいかに唯物論と切り離せないかが論じられてきた。これらの先行研究をもとに、身体化され表象されてきた空想力（fancy）が美学的、道徳的な問題を孕んでいたことについて考察した。文学作品は主にレノックス、ラドクリフ、ウルストンクラフト、デイカ、オースティンら女性作家の作品（いずれもゴシックなど、ロマンスに分類される小説）を扱った。彼女らが影響を受けた医科学言説（Erasmus Darwin, Crichton, Haslam）も丹念に精読し、その感受性言説の影響について検証した。

４．研究成果

① 感受性という道徳的意味を担った概念が、道徳的にも、また社会的機能といった点からも、性、風俗、消費、医学と結びつきながら、多面性・多層性をもって文学言説上に用いられ、あるいは表象されていることが明らかになった。

② 土井や大石のとった社会史的な視点を取り入れたアプローチ、小川が試みた医学との接合、吉田による新歴史主義的観点からの宗教言説の研究、そして吉野や川津が取り入れたポスト・コロニアリズムのアプローチという多面的な方向から感受性をとりあげることで、その多層性が明瞭に示された。

③ 共感的感受性が土井、大石、吉野の研究において中心となったが、母性、慈善、教育、風俗、植民地支配のなかでイデオロギーとして機能している位相がこの時代の文学から看取できることが明らかになった。

また川津が示した菜食主義との関連や小川が指摘した医学的意味、吉田が論じた宗教的意義からは、感受性が同時代に持ちえる多面的かつダイナミックな浸透が浮かびあがってきた。

④ 教育やジェンダーの問題、また植民地との関係において感受性がとりわけ支配的な概念であったことから、本研究の最終年度には感受性の制度との密接な関係性が浮かびあがってきた。次年度以降におこなうべき新たな研究テーマとして検討するに至った。

⑤ 分担に従って遂行した各研究は研究会や学会における口頭発表などを通して検討を行ったうえ、投稿論文などにより逐次公表するように心掛けた。

また研究会では平成 25 年度に井上櫻子(慶應義塾大学）、平成 26 年度にジャネット・トッド（ケンブリッジ大学）、デレック・ヒ

ューズ（アバディーン大学）、平成 27 年度に原田範行（東京女子大学）を招聘し、それぞれルソー、ジェイン・オースティン、18 世紀後半のヨーロッパ演劇、サミュエル・リチャードソンを中心に講演をしてもらい、公開講演会として一般研究者にも議論の場を提供し、本科研の成果を検討する場を設けた。

最終年度である平成 27 年度後半は、本研究で明らかになった点を、個別論文のかたちで執筆し、研究会で批判・検討した後に、編集し取りまとめた。

各メンバーの個別研究成果は以下の通り。

土井良子

本研究では 1780-90 年代の教育論と小説における感受性表象を、この時期に浸透が加速した女性の母役割推進イデオロギーとの関連から分析した。母性賞揚の傾向は感受性の抑制を説く教育論にも反映されているが、小説においてはラドクリフの『イタリア人』のように共感的感受性こそが母性の要として表象される例がある。また、ジェイン・オースティンの初期作品はパロディを通して一見、感受性・感受性文学批判を教育論と共有するかに見えるが、実はパロディが逆に女性を家庭内役割から解放する機能を果たす。これらの 18 世紀末の女性作家たちが、良妻賢母育成を目指す男性中心的なジェンダー・イデオロギーと結びついた教育論的な感受性抑制の言説を受け入れるかに見えつつ、小説内の感受性表象を利用して密かな反撃・転化を試みていたことが考察できた。

このような感受性表象の複層性を理解することは、感受性とジェンダー制度との関係に関する今後の研究を進めるうえで重要な意味を持つとともに、現代日本における男女共同参画社会実現に向けた諸問題の解決への一端を提供することができると考えられる。

吉野由利

エッジワースのフィクションは、アイルランドや西インド諸島の支配階級の消費文化の流行（fashion）に敏感な感受性の弊害を奢侈に結びつけ図式的に描く。そのため、従来、理性による感受性の制御を説く教訓性に強いとされてきた。しかし、本研究のように、感受性の不道徳性と道徳性が連続する側面を重視する観点から捉え直すと、主人公は改悛後もイギリスの社会改良の風潮（fashion）に反応する鋭敏な感受性を維持し、その感受性は先住民や奴隷と双方向的に「共感」(sympathy)をやりとりする関係の要として描かれることが分かった。このように、感受性の道徳的二律相反性に対するジレンマを孕んだニュアンスを検証し、作品の再評価につながったのは画期的である。また、エッジワースの植民地表象は、帝国の標準的読者の「共感」の限界、つまり、イギリス的感受性の限界と拮抗しているのではないか、という可能性に着想した。近年の多文化共生社会の問題と関連する研究課題として、今後発展させる。

川津雅江

18 世紀の感受性の時代からロマン主義時代にかけて、男性作家たちだけではなく、ウルストンクラフトやトリマーのような女性作家たちも普遍的仁愛を動物まで広げるように訴えたけれども、同時に人間が肉を食べる権利を擁護した。その一方で、動物愛護と菜食主義を結び付けるものもいた。ジョン・オズワルド、ジョゼフ・リットソン、P・B・シェリーのような男性作家たちはルソーに影響を受けて菜食主義と共和主義を結び付けて考え、菜食を実践すれば動物を含めすべてが平等で共生する未来世界が到来すると唱えたに対し、女性作家の場合、それほど急進的ではなかった。キャサリン・マコーリーはルソーの影響があるけれども、社会批判よりもむしろ肉食が子どもの精神育成に与える悪影響に関心を寄せ、望ましい未来社会の担い手にするために子供の食育を重視した。さらに、エリザベス・ハミルトンはもっと穏便な手法をとった。『ヒンドゥー・ラージャの手紙の翻訳』(1796)では、他者に対する思いやりの集約たる菜食の重要性をイギリス植民地下の菜食主義のヒンドゥー教徒を介してオブラートに包んで提示しつつ、イギリスでは倫理感育成が目下の急務であることを仄めかした。

以上の研究により、ロマン主義時代における動物に対する感受性には教育的側面と社会的批判面があり、その描写にはしばしばジェンダー差も見られることがわかった。また、イギリスの動物愛護と菜食主義の言説がインド植民地行政に付随するオリエンタリストたちのインド史やインド表象と深く関連しているという知見も得られた。この知見により、ロマン主義時代の動物への感受性をトランスナショナルに考察する必要性が示唆された。

大石和欣

慈善というテーマを中心に据えながら、文学領域において一見道徳的行為として見なされがちな慈善が、実は不道徳でありうる賭博と裏返しの関係であるばかりではなく、憐憫や慈愛がいつのまにか恋愛感情や色恋沙汰と結びつき、スキャンダルとなって社会へ流布していく状況を考えた。

感受性が慈善のベースであることはすでに多くの研究者が指摘していることだが、それがいかに消費経済と結びついているかを歴史的資料やフランシス・バーニー、ローレンス・スターン、ヘンリ・マッケンジー、ハナ・モア、メアリ・ウルストンクラフトらの小説のなかから事例を探した。また、慈善家たちにとって慈善が虚栄心を満足させる行為、あるいは名誉のためである事例や、賭博と同義として捉えられている事例を歴史的言説のなかで探す一方で、文学作品のなかでも同様の事例を調べた。

吉田直希

従来の研究では、宗教における禁欲の表象がなぜ、近代科学の自然理解と密接な関係を結んでいたのかを歴史的に考察する視点が欠けていた。本研究で用いた新歴史主義的アプローチにより、リチャードソン、クレランド、スターンらの小説作品が表す感受性の宗教的／科学的表象のもつ二重性が今後、研究対象としてクローズアップされるようになるだろう。特に、フランス唯物論における精神の物質性に関する議論がなぜ同時代の「悪徳」に結びつけられていたのかを考察することにより、公共圏における女性の二面性（消費者／商品）についてその多層的意味が明らかになる。文化の創造者としての理想的女性像がいかにして作られ、また同時に女性化する文化に対する痛烈な批判が公共圏内でどのように議論されてきたのかをさらに検証し、ハーバーマス流のホモソーシャルな公共性概念とは一線を画す、不道徳な感受性をつねによびおこす 18 世紀公共圏の姿を今後も描き出していく。

小川公代

ロマン主義時代における女性性と感受性、そしてその不道徳性の問題は、とりわけ身体性との関連性において当時の小説に顕著に表されていることが確認された。それについては「ウルストンクラフトとオースティンのゴシック表象 」（2013）や「『高慢と偏見』にみる感受性—錯誤と精神医学言説」（2013）といった論文で報告した。感受性が官能と連関する一方で、共感、才能、美意識といったより肯定的な性質を生み出すものとして称揚しようとする態度が見いだせたことができたのは意義深い。これは「『エマ』におけるイマジネーションの矛盾」（2015）といった論文などに著した。現在、感受性と女性の身体を問題視したイギリス小説の日本における受容を研究している。近代日本の黎明期鋭く捉える野上弥生子の『真知子』や島崎藤村の『破戒』などを分析しながら、今日にいたる道徳と女子教育の問題についても考えを発展させることは社会的にも意義をもちうる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 15 件）

①<u>大石和欣</u>、ギャスケル v. ギャスケル ― ユニタリアン男性たちの言説とユニタリアン女性たちの公共圏—、『ギャスケル論集』、査読有、第 25 号、2015、31-44

②<u>小川　公代</u>、『エマ』におけるイマジネーションの矛盾、『日本ジョンソン協会年報』（日本ジョンソン協会）査読無、39 号、2015、5-9

③<u>川津　雅江</u>、動物の自伝と動物愛護教育—ドロシー・キルナー『ネズミの生涯と漫遊』とスティーブン・ジョーンズ『ハエの生涯と冒険』を中心に、人文科学論集、査読有、94 巻、2015、15-31、DOI:10.15040/00000030

④<u>吉田　直希</u>、『乞食オペラ』における諷刺の階級／ジェンダー的主体の捻れ、成城イングリッシュモノグラフ、査読無、44 巻、2015、141-167

⑤<u>川津　雅江</u>、Review: Jane Moore(ed.), *Mary Wollstonecraft* (Farnham: Ashgate, 2012)、*Studies in English Literature*、査読有、55 巻、2014、123-129

⑥<u>小川　公代</u>、『高慢と偏見』にみる感受性—錯誤と精神医学言説、イギリス・ロマン派研究、査読有、37 巻、2013、19-32

⑦<u>小川　公代</u>、ウルストンクラフトとオースティンのゴシック表象、ジェイン・オースティン研究、査読有、7 巻、2013、89—99

⑧<u>大石　和欣</u>、（書評論文）伊藤航多・菅靖子・佐藤繭香『欲張りな女たち—近現代イギリス女性史論集』、ヴィクトリア朝文化研究、査読有、11 巻、2013、102-108

〔学会発表〕（計 14　件）

①<u>土井　良子</u>、Troublesome Women and the Trouble of Womanhood in Jane Austen's Juvenilia, 日本オースティン協会第 9 回大会パネル・ディスカッション「オースティンとブロンテの Juvenilia を論じる」、2015 年 6 月 27 日、フェリス女学院大学（神奈川県横浜市）

②<u>吉野　由利</u>、マライア・エッジワースのインド表象—イギリス帝国と＜共感＞、日本オースティン協会第 9 回大会シンポジウム、2015 年 6 月 27 日、フェリス女学院大学（神奈川県横浜市）、招待講演

③<u>小川　公代</u>、ゴドウィン・サークル—アナキズムの思想をたどって、レイモンドウィリアムズ研究会、2015 年 3 月 15 日、関西学園大学（兵庫県西宮市）、招待講演

④<u>小川　公代</u>、Mary Shelley's Frankenstein and the Paradoxes of Vitality、Wordsworth Summer Conference、2014 年 8 月 11 日、Rydal Hall（Grasmere, UK）

⑤<u>大石　和欣</u>、Keats,　Pre-Raphaelites, and Japanese Aesthetes、Romantic Connections、2014 年 6 月 14 日、東京大学（東京都文京区）

⑥<u>小川　公代</u>、The Responses of Austen and Nogami to the Contemporary Medical Gaze、Romantic Connections、2014 年 6 月 14 日、東

京大学（東京都文京区）

⑦川津　雅江、動物の It-Narratives と子どもの教育、日本英文学会第 86 回大会シンポジアム第 3 部門、2014 年 5 月 24 日、北海道大学（北海道札幌市）

⑧吉田 直希、Representations of Asia the Long Eighteenth Century、The American Society for Eighteenth-Century Studies、2014 年 3 月 22 日、Williamsburg Lodge(Virginia, U.S.A.)

⑨大石　和欣、ヴォランタリズムとジェンダー—文学と歴史の境域—、ヴィクトリア朝文化研究学会シンポジウム「ヴィクトリア朝とヴォランタリズム、2013 年 11 月 9 日、甲南大学（兵庫県神戸市）

⑩小川　公代、The Solitary Self in Godwin's St Leon and Fleetwood: Hazlitt's Disinterestedness and the Fictionality of Sympathetic Relations、Wordsworth Summer Conference、2013 年 8 月 8 日、Rydal Hall(Grasmere, U.K.)

⑪土井　良子、Elizabeth Bennet and the Japanese 'Modern Girl'、Romantic Imports and Exports: BARS Conference 2013、2013 年 7 月 25 日、University of Southampton (Southampton, U.K.)

⑫小川　公代、Representations of Femininity in Nogami Yaeko's Versions of Pride and Prejudice、Pride and Prejudice Conference: Celebrating 200 years of Jane Austen's best-loved novel、2013 年 6 月 21 日、Cambridge University（Cambridge, U.K.）

〔図書〕（計 14 件）

①OGAWA Kimiyo, OISHI Kaz　他 9 名、Palgrave Macmillan, *British Romanticism in European Perspective: Into the Eurozone*, 2015, 286(26-44, 69-88)

②川津　雅江、吉野　由利　他 13 名、開拓社、十八世紀イギリス文学研究—第 5 号 共鳴する言葉と世界、2014、370(96-113, 200-15)

③OISHI Kaz　他 7 名、Art Editions North / Wordsworth Trust、*Wordsworth and Basho: Walking Poets*、2014、180(49-51)

④小川　公代、大石　和欣　他 15 名、三修社、イギリス文学入門、2014、455（120-21, 124-25, 128-37, 146-47, 150-59, 372-75）

⑤小川　公代　他 4 名、北樹社、文学理論をひらく、2014、207(14-28, 64-86)

⑥小川　公代　他 9 名、上智大学出版、北米研究入門—「ナショナル」を問い直す、2014、302(91-118)

⑦小川　公代　他 19 名、英宝社、イギリス文学と文化のエートスとコンストラクション、2014、476(15-24)

⑧吉野　由利　他 18 名、松柏社、十九世紀「英国」小説の展開、2014、457(24-44)

⑨大石　和欣、川津　雅江　他 13 名、彩流社、境界線上の文学、2013、259(5-9, 10-20, 121-37)

⑪小川　公代　他 11 名、春風社、幻想と怪奇の英文学、2013、403(166-188)

⑫OISHI Kaz　他 10 名、Bloomsbury, *Coleridge, Romanticism, and the Orient: Cultural Negotiations*、2013、224(85-102)

⑬土井 良子 他 7 名、丸善プラネット、文学、社会、歴史の中の女性たち＜II＞学際的視点から、2013、155(46-66)

⑭吉野 由利 他 14 名、彩流社、ジェンダーと＜自由＞、2013、334（173-92）

６．研究組織

(1)研究代表者

土井　良子（DOI, Ryoko）
白百合女子大学・ 文学部・准教授
研究者番号：80338566

(2)研究分担者

川津 雅江（KAWATSU, Masae）
名古屋経済大学・法学部・ 教授
研究者番号：30278387

大石和欣（OISHI, Kazuki）
東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
研究者番号：50348380

小川 公代 （OGAWA, Kimiyo）
上智大学・外国語学部・准教授
研究者番号：50407376

吉野 由利 （YOSHINO, Yuri）
学習院大学・文学部・ 准教授
研究者番号：70377050

吉田 直希（YOSHIDA, Naoki）
成城大学・文芸学部・ 教授
研究者番号：90261396